

第一話 この恋は、微笑みながら消えていく。

僕の妹の足は、生まれつき不自由で。父と母が望むのは、「足のせいで軽視・蔑視されたくない」生き方。僕とて同じだ。足のことでミシエーラをとやかくいうやつは、僕が許さない。喧嘩だつて、やぶさかではない。

強い「お兄ちゃん意識」は、家庭環境で育まれるべくして育まれた。別段それを「負担だ」と感じたことはない。重荷に感じるなど言語道断。むしろ僕には誇らしかった。守るべき妹がいるのだ。どれだけ神に感謝したつて、しきれない。

ミシエーラのお兄ちゃんであいられて、僕は幸せなのだ。いつも思っている。

僕は、勉強ができなくていい。運動が苦手でもいい。妹のよきお兄ちゃんであることが、この人生において、なによりも重視された。

妹は、勉強ができる。明るく、人望がある。両親や僕の心配などなくても、本当はきつと、うまくやっついていける。愛されるべくして生まれた人間とは、どんなハンディキャップがあろうとも愛されるのだ。

それでも。過保護でいさせてくれよ。僕たちは家族なのだから、兄妹なのだから。大切に思うのは当たり前じゃないか。「これなんてどうかしら」

きっかけは、インターネット検索をしていた妹の、二カ月前の言葉だった。

綺麗なドレスを着た女性が、映像の中、クルクルと舞い踊っている。車椅子で。

車椅子でダンスなんて、考えたこともなかったから。僕はびっくりした。

よく見れば、女性のドレスは、無駄にヒラヒラ・フワフワした足元にはなっていない。タイヤの巻き込みにあつたら危険だからだろう。代わりとってはなんだが、襟元や手首なんかヒラヒラしている。

ダンスの衣装つてのは華やかで美しい。女の子はやっぱ、こういうのが好きなんだな。

「どうかしら、お兄ちゃん」

「いいんじゃないか？ お前の努力次第、だけど」

「やあねえ、なに他人ごとみたいにいってんの？」

「え？」

「お兄ちゃんも踊るのよ。それとも、なに？ 可愛い妹をエスコートする度胸はない？」

「僕はいいよ。だって、……お前の足、引っ張りたくないし」

「足くらい引っ張ればいいじゃない。ま、私の足は、コレなんだけどね！」

「お前なあ。笑にくい冗談、やめろよ」

クスクスと、妹は上機嫌に笑っている。僕の妹は、ちよつと悪趣味なジョークにたびたび走るのがたまに傷なただけでも。それさえも、運命に負けない強い女になるんだと予感させるアイテムだった。

「文化祭の出しものなんだから、楽しければいいのよ。完璧なんて二の次じゃない」

文化祭は二カ月後。僕たちは体育館を借りて練習することになった。

いつもの電動車椅子じゃ、踊りづらいことが判明。父さんが、もつと軽い車椅子をレンタルしてくれた。小回りが利いて、これにはミシエーラも喜んだ。

ミシエーラは、なんでもそつなく、うまくこなす。そうじゃない僕は大変だ。リードするどころか、リードされてしまう。これはまずい。

お兄ちゃんってのは大変だ。妹に恥をかかせてはいけない。クルクルと踊るミシエーラは、きつと素敵だろう。同じ学校のやつらだって、見惚れるに違いない。

喝采を浴びるミシエーラの姿を胸に描く。

僕は自主練を敢行することに決めた。ミシエーラよりも二時間早く起きて練習だ。

そのため、母さんに「文化祭が終わるまで、朝食はいらぬ」と伝えた。母さんも仕事に出ている。二時間早く起きる僕のために朝食を作るといふのは、とてつもなく大変なことだということくらい、十五歳の僕にだってわかっていた。

「ミシエーラのために、レオ、頑張ってくれるのね。お兄ちゃんが頑張ってくれるのに、母さんが張り切らないわけ、ないでしょ？ ちゃんと朝ご飯食べなさい。身長、伸びないと困るのはレオでしょ？」

ありがたいと伝えるのが、なんだか照れ臭い。僕は、大きな反抗期は、自分では迎えていないつもりだけ。それでもやっぱり、年頃の男の子ってやつなので、母親相手に真正面から、感謝

の言葉を伝えるのはくすぐったいのだ。

母さんは、嬉しそうにこり微笑むと、大袈裟に僕をからかったりすることもなく、自分のスマホを取り出す。

「目覚ましアプリで、いいのがあるのよ」

「そんなの、なんだって一緒だろ？」

「それが、ちよつと違うのよ」

母さんが、楽しそうに説明してくれる。

目覚めたい時間にセットすると、誰かからその時間に、電話がかかってくるらしい。電話に出て、会話をすることで、二度寝を防止するんだそうだ。

自分の性別をセットし、「できれば男性・女性、どちらにかけてきてほしい」なんて贅沢な希望まで付加できる。(こ希望に添えるかどうかは、あなたの運次第です！)

スマホアプリで繋がっている人なら、どこの国の人からかかってくるかもわからない、なんて大袈裟な宣伝も打ってる。それこそ、世界各国、どこの国とでも繋がるのかな？

母さんの職場では、今、ちよつとした人気が高い。

スイスでは朝でも、どこの国では昼真ただ中。一人ランチの寂しい時間を埋めるのに、ちよつとよよかったりして。かけてくれる人もいるんだとか、いないんだとか。

「でも母さん。息子にこんな出会い系アプリ、すすめていいの？ 僕、運命の相手と繋がっちゃうかもよ？」

「あはは、運命の相手かあ。繋がるんなら早めに繋がってほしいくらいだわ。あんた、今までガールフレンドの一人も、ウチに連れてこないんだもの」

母親にからかわれたんじや、勝ち目は無い。僕は自分の部屋にさっさと引き返し、さっそくアプリの設定を開始する。

ええーっと、起こしてほしい時間。対応言語、と。性別は男。年齢は設定できないんだな。

起こしてほしい性別は……男にしておこう。べ、別に、見知らぬ女性と、なにしゃべっていいかわかんないから。困るとか、そういうんでビビってんじやねえし！ 未成年だから、極力トラブルは避けた方が親孝行かなって思っただけだし！

「……」

これで、六時間後。誰かが電話をかけてきて、僕を起こしてくれるのか。

誰からも相手にされなかったらどうしよう？ 本当に相手にされなかったら、機械音で、ふつーに起こされるらしい。それはそれで切ないな？

このアプリは「ポイント加算システム」で。目覚ましをセットするだけで三点もらえ、誰かを起こしたら十点もらえる。使うほどにポイントがたまるんだ。アプリポイントを増やしていくと、たまった点数に応じ、アプリ内景品と交換ができる。

二カ月起こしてもらっただけで、ポイントがわりとたまる計算だな。

怖い男の人から、電話きたらイヤだなー。そういう時は、すぐ切ろう。アプリ内で電話を繋ぐらしく、相手にこちらの電話番号を知られることはないそうだ。

通話可能時間は、最長で三分。電話をかけてきた相手に絡まれる危険も、この程度の時間じゃ、ないだろう。

安全に使えば、悪いアプリではなさそうだ。

すっごい眠いの。朝早くから、アホみたいに電話が鳴ってる。

早く出ないとこれ、家族のみんなに迷惑かけちゃう……

……って、誰だよ。こんな朝早くに電話してくるような友だち、心あたりないぞ……？

『ハロー いい夢は見たかい？』

……は？ 知らない声だ。

「え、と…… どちらさま……？ つか、え、間違い電話です……？」

『その声は、まだ寝ぼけてる？ きみの国では今、朝の五時六時、早朝ってところ？』

「……あ、そうだ。僕、今日から早起きするんだっ」

『ちゃんと起きた？ じゃあ、さっそくで悪いんだけど、きみの携帯に表示されている、キーワードを教えてください』

そうだった。僕が入れた目覚ましアプリは「ちゃんと起きたら、スマホ画面に表示されたキーワードを相手に伝える」なんだ。起きた証拠として、僕もこれを、あとでアプリに打つ。(音声入力可)

二人のキーワードが揃って、はじめてポイントになる。

「キーワードは [Hello, world!] です。起こしてくださいって、ありがとうございます！」
『OK じゃあね、よい一日を』

知らない人との通話は、これだけで終わった。知らない同士だもんな、こんなもんか。でも、おかげですっごいはつきり目が覚めた。家族に起こされると全然違う。ちよつとした緊張感が、目覚めにはちようどいいのかも？

知らない人は、少し高めめ、甘い声をした男性だった。年上だろう、落ち着きを感じた。……これ、毎日違う人がかけてくるのかな？

ベッドから抜け出し、部屋の外へ出た。キッチンからは早くも、ベーコンの焼ける匂いがしていた。

一週間、母さんおすすめ目の目覚ましアプリを使ってみた。

同じ人に起こされることはなく。五人の男性と、二人の女性がかけてきてくれた。

こういうアプリを利用しようと考える人たちだし。ポイント目当てだろうと、自発的に「起こしに行く」人たちだからだろう、みんな愛想がよく、ありがたいことに、通話範囲内の三分間で、気を悪くしたことは一度もない。もしかしたらそこには「キーワードを教えてもらうまで、ヘタに機嫌を損ねるわけにはいかない」なんて考えがあるのかもしれないけど。

ポイントを貯めることを、僕も考える。バイトもしていない学生の身としては、ポイント貯めればもらえる景品は魅力的。母さんが教えてくれたアプリなんだし、後ろめたさもないっていう

のが素晴らしい。

少ないポイントでもらえる景品を、回数多くもらう方が得なのかな。それとも、高いポイントでもらえる豪華景品までコツコツ頑張るか。考えどころだなあ。まだ五十ポイントも貯まってないから、気の早い悩み？

今日は僕も、誰かの目覚ましになるべく、架電する側になってみたいと思う。僕自身の起き抜けにかけたんじや、頭ん中まとまんないし、相手にも失礼だから。学校の休憩時間を利用する。絶妙に暇で、頭も起きている。隙間時間でポイント稼ぎ、賢い選択だ。

この時間になつたら起こしてくださいと、サインを出している人の名前がリストに並ぶ。男性ユーザーは青、女性ユーザーは赤で表示されるが、もちろんこれは「登録者の入力した情報である」ことから、正確かどうかは不明だ。女性なんかは、わざと男性と偽って登録し、女性に起こしてサインを出すケースもあるだろう。みんな、余計なトラブルは避けたいから。自衛は、しいより、した方がいい。

顔も本名も年齢もわからない女性の目覚めを任されるというのは、まだまだ僕には荷が重い。だから、男性ユーザーを起こすことにする。本当に男性であることを祈ろう。

こつちがお昼だから、僕に起こされる人が朝だとすると、時差は六時間かそこらだろうか。でも、決めつけはよくない。夜型の人という可能性もあるからだ。

人さまに威張れるほどのコミュニケーション能力を持たない僕は、電話をかける前に、いくつかの妥当な言葉を用意することを考えた。

『おはようございます、起きる時間ですよ。目覚ましアプリのリストを見て電話をかけました。そっちは何時ですか？ 頭は冴えてますか？』

これくらいのことを話しかければ、どこかで相手の相槌やら返事がくるはず。それに調子をあわせればいい。年上の人には終始敬語がいいかな。同世代っぽかったら、わざと砕けた感じの方がいいかな。

直近の「なごやかさん」というニックネームをタップする。あ、誰かがすでに電話したらしい。他の人を起こしてあげてね、とメッセージが表示された。

他は、えーっと、女性が三名続いて……

あ、この人、男。「スカーフェイスさん」だな？

繋がるかな？ えいつ。……コール音が鳴った。

……コール、三回……五回…… うーん、出ないな。眠りこけてるのかな？ それとも、表示されている僕のユーザー名「トータスナイト」を見て、「なんだ、女じゃないのか。だったら出ない」という強硬手段に出たのか。うーん、でも、一応この人も、かけてきてほしい相手は男でチェックしてるんだけど。

「あ、繋がった！」

おもわず声を出してしまったら。お互いの挨拶をする前から、電話口で、ぷっと笑われる。男性の声。ちよっと明るくて高い感じの声だ。

『おはよう、僕、待たせちゃった？』

「いえ、そんなことありませんよ。おはようございます」

よかった、語りかけてくる口調が柔らかない。

「えっと。目覚ましアプリのリストからタップして、電話しました。これからお仕事ですか？」

『うわあ、目覚めてすぐに、仕事という単語は。聞きたくなかった』

「あ、すみません」

そ、そうか。僕より年上っぽいという声だけのヒントで「目覚ましをかけてでも起きる。つまり、これから仕事だ」と短絡的に結びつけてしまったが。仕事で起きるけど、イヤイヤ起きる人もいるんだな。今度から注意しよう。

『……あれ？ きみの声、なんだか聞き覚えがあるな？』

「え、そうですか？ 自分でいうのもなんですけど、どこにでもありそうな声ですもんね」

『そうではないと思うよ？ 男に起こされるなんて、どれだけ目覚めが悪いだろうって、戦々恐々としていたんだけど。ダミ声に起こされなくて、ほんとによかった。感謝してる』

スカーフェイスさんは、僕なんかと違い、かなり優れたコミュニケーション能力の持ち主っぽいぞ？ 会話のテンポがいい。

『伝え忘れる前にキーワードを。僕からのキーワードは「人魚は空に還る」だよ。OK?』

「OKっす」

今回の目的「起こすこと、キーワード回収」をすませてしまおうと。途端、会話が続かなくなる。意外と三分つて長いな？ まあそうか、カップメン作れるくらいだし？

『それじゃあありがとう、バイバイ、トータスナイトくん』

「あ、はい、いつてらっしゃい」

電話の会話って、すぐにぶちっと切れてしまう。なんていうか、余韻に乏しいなあ。まあいいや。こういうのも新しい遊びと思えばいい。めんどくさい時は、こっちからかけるってことをしなければいいだけだ。

■ □ ■ □

世界は生きているから、一秒一秒で表情を変える。

同じものなど一秒先には、なにも存在しない。

風になびいて赤い花弁が揺れるのを見てもわかる。水中を泳ぐ魚のウロコが銀色に反射しているのを見てもわかる。空にのぼっていく黄色い風船の、胸がすぐくらの高さからも見てとれる。僕が目にする一秒一秒は激動しており。その変化をとめることは、誰にもできやしない。

この大崩落を起こした張本人にもだ。

一秒？ いや、コンマ0.1秒で。世界が変わっていく。

ビルは千切れ、不気味な引力に飲みこまれていく。コントロール能力を失ったスーパーマンみたいに、暴風に乗る、次々と人が飛ばされている。メアリー・ポピンズでも、傘を開くののためらうレベルといえは、伝わるだろうか？

砕けたコンクリートの塊が、ヒョウのように降ってきては街を破壊し。地割れを起こした地球は、バックリと口を開け、車だの店だのを飲み込んでしまう。

火災があちこちで発生。だが、街の消防団が活路を見い出せる状況ではない。彼らの頭の中に嫌というほど叩きこまれたニューヨークの地図は、もはや、目の前に広がってなどいないのだから。

八階建てのビルを飲み込む爆発。爆発は、鉄筋を飲みこんだ火龍みたいに黒煙を、天へと向けて吐き出している。

人々の悲鳴が上がる。命ある限り、救いを求める声を振り絞る。「助けて、助けて！」必死な訴えだ。

大怪我をした人から助けますと、命の順序がつけられる。その前に救急車に乗っているのは、街の有権者や金持ちといった連中。

重力変動まではじまり。いよいよ、無力な人間は、立っているのもままならなくなる。

天と地が引つ繰り返るんじゃないかという状況。こんな騒動のさなかに自分の身を置くことになるとは思わなかった。そりゃあ、僕は牙狩りの一員として、いろんな体験はしてきたつもりでいるけど、ここまでの無茶振りにはじめてだ。

どんちゃん騒ぎのるつぼの中で、街は、ニューヨークという名すら奪われる。

僕はここで戦って・闘って、いずれ死ぬんだろうな。クラウスを守るためだろうか、わからなけれど。ついに、とうとう、命を張る場所に辿り着いた。

真っ白い霧に包まれた闇の中、星さえ輝かない夜。それでも、天を仰ぐと、感慨深さに息を吐いた。

いつ死んでもおかしくない街にとどまり続ける。僕はきつと、この街で死ぬ。ああ、……なんて心休まる響きだろうか。

「あら、スカーフェイス。生きてたの？」

「起きたら十五時だった……ごめん」

「ここ最近、コン詰めすぎたせいもあるんじゃない？　ウチみたいに家族の誰かがいるとか、クラッチみたいに執事が世話してくれるとか。そういうのがまったくないのは、あんただけなんだから。たまの寝坊も仕方ないわよ」

「ごめん」

スマホを改めれば、クラウスとK・Kからの着信履歴がズラリと並ぶ。

ニューヨークで異変が起こり。それがどうにか落ち着きの色を見せたのが一週間前。州知事と異界の代表とやらが会談を何度も重ね、協定を無事、結んだ。もちろん、双方から非難ごうごうだ。「得体の知れない化けもの（人間）（異界人）となんか暮らせるか」ってね？　でも、受け入れ難くとも、受け入れざるを得ない状況だ。なぜなら異形はもうすでに、ここに在るのだから。まるで凄惨なレイプ事件のようだと、僕なんかは思う。ニューヨークという人界が、異界に襲われ犯され。HLという名の赤ん坊を孕み、産み落とした。

ここに生きる道を選んだ僕らは、レイプ犯の子ども。きっとニューヨーク自身、産み育てるのには戸惑いがあっただろう。それでも。

胎の子は、母親の腹の肉を噛み破り、生まれてきたのだ。母であるニューヨークは、死に絶えたか、瀕死の重傷って感じだろう。人間はヒューマー、異界人はビヨンドと呼ばれることに決定された。レイプ犯の子だろうと、産まれた子に罪はないと、いい繕うように。

核だとか放射能だとかじゃない、新たな危険の存在が浮き彫りにされた。「ヒューマー」でない人類は、ニューヨーク・HLを見捨て、切り捨ててるだろうか。

報道番組は今も尚、うしろ向きな人類の声を拾い集め、人々の心に暗い影を残すだけの活動を、ヒステリックに続けている。異界との協定が結ばれたあとも、撤回を求める活動が行われている。反対派が双方に必要な数いる。歩み寄るなんて、言葉じゃ綺麗にいても、いざやろうってなると、なかなかできないのが現実だ。

夢じゃない現実。クラウスと僕が組んで、新しい組織を作る。牙狩り本部にその主旨を説明、筋を通し、念も押し。一応の許諾を得た。だが、本部にはなにも頼れない。これからなにかを必ずなすだろう僕らだが、今はまだ本格始動のため、人員集めや設備設計などに追われる毎日だ。僕とクラウスの人脈と経験だけではどうにもならない場面が、必ずくる。

今はただ、K・Kが僕らの要請に応じてくれたことがありがたい。僕らの戦場の女神、僕にとっての永遠のベアトリーチェ。この混濁とした街で彼女と再会できたのは、僕にとつての幸いといえた。

「あんた、ちよつとその携帯、貸してごらんさいよ」

なにか案を思いついたとでもいわんばかりの顔で、K・Kが僕のスマホへと腕を伸ばす。

「ええ、なに、壊したりしないでよ？」

「まあまあ、ちよつと静かに待つてなさい。いいアプリ教えてあげるから」

「アプリ？」

「そうよ。寝ぼすけなあんたを起こしてくれるアプリ」

「そんなの、アラームを設定すれば、じゆうぶんじゃないか」

「それじゃステイブン先生が起きれないから、アプリにすがるのよ」

まいったな。僕たちの何十年以上のつきあい、僕が寝坊したのなんて、今日一度だけだっていうのに。K・Kの中で、早くも僕は「寝ぼすけキャラ扱い」されている。

「これよこれ。パスワード入力、はい」

「目覚ましなんだろ？ わざわざアプリをダウンロードするほどじゃない」

「いいじゃない。あんたの生活には娯楽が足りないのよ」

K・Kの調子から察するに。どうやら「招待コード」のようなものがあり。招待者がアプリをダウンロード、一定数使用すれば、K・Kにメリットがあるのだろう。

彼女は、戦闘員である前に、一人の女性である。女性というのは、なにかと特典が好きなのだ。ダウンロードボタンを押す前に、アプリの内容を確認。簡単な情報を登録し、目覚ましをセツトすれば、指定時刻に暇をしている「誰か」が電話で起こしてくれる。誰も電話してこない場合、

普通のアラームで起こされる。

「ふうん。わざわざこんなものまで利用しておいて、アラームで起こされるのかと思うと。なんだか切ないものを感じるよ」

「大丈夫よ。通話時間はたった三分。そのくらいの時間で、一般人が。あなたの性根の悪さを読むなんて不可能なもの。誰かがきつと、起こしてくれるわ」

パスワードを入力し、ダウンロードが完了したのを見守ってから、改めてスマホをK・Kに手渡す。面倒な入力など、ついでに任せてしまおう。

「ユーザー名は、そうねえ、やつぱり、スカーフフェイスかしら？ 性別は男、つと……」

「年齢は五つくらい、若くサバ読んでおいてよ」

「二十代に思われないなんて、厚かましいわあ。残念だけど、年齢入力はないのよね。アプリ配信元も、あんたみたいな男が、十代・女性を狙ってかけるパターンを想定して、犯罪防止意識でも働かせてるんじゃない？」

「悪いけど、子どもはお呼びじゃないよ」

「じゃあ、かけてくれる人の要望一位は、男性に設定しとくわねえ」

きつと、「なんでそこで男性限定？」とたずねようものなら、「三分で女を口説かないなんて、あんたじゃ信じられないからよ」とでもいわれるんだらうな。

「でね、これなんだけど。使えば使うほど、アプリ内ポイントが貯まるのよねえ。いくらかポイントをためたら、それを、他のユーザーにプレゼントすることができるの」

ほらきた、うまい話の「裏」が露見するぞ。

「ここまでいえばわかるわよね？」

「わかったわかった、せつせとポイントを貯めて、きみに献上すればいいんだろ？」
「話が早くて助かるわあ〜」

こんなアプリで、せこせこポイントを貯めるんじゃない。これがほしい」と一言いつてくれれば、長いつきあいだ、これからは無理難題も押しつけるんだ。プレゼントくらい、気前よく贈るのに。それは、イヤなんだろうなあ。

それこそが、僕の想いが【恋愛】まで発展しなかった、大きなポイントといえた。

一定数値以上、確実に僕はK・Kが好きだが、それは恋愛ではない。隣りに住む高嶺の花のお姉さんに憧れるような、優秀すぎる幼馴染に対して抱いた、甘く仄かな感情。まさしく、ベアトリッチェに対する気持ちなんだ。

可愛げのない女だ。わかってたけど。もうちよつと僕に甘えるような仕草があつたらな。僕はきつと、彼女に恋をしていたらろう。オトコとして、ちゃんと、オンナとして、ね？

まあ、無理だったのだ。今さら深く追及はするまい。人の妻で、人の母なのだ、すでに、K・Kは。

僕の要請を受け、この街にきてくれた。それだけで、じゆうぶんじゃないか。

あとでアプリ内ポイントを購入し、忘れた頃にプレゼントしておこう。間違つて買ってしまつたといひ張ればいいんだ。毎日ちまちまポイントを稼ぐなんて馬鹿らしい。

ポイント稼ぎなんて。交友関係をイチから築かなくてはいけない現状の中、イヤというほど毎日繰り返す行為だ。隙間時間まで、そんなことに明け暮れたくはない。

「あ、それから。このアプリ、ポイント購入はできないから。毎日地道にコツコツためてちょうだいね？」

「それはまた……面倒なこと、この上ないな」

眉間にしわを寄せた。ポイントが購入できない？ だったらこのアプリは、なにを収入源にしているんだ、なにが目的で存在してるんだ。まったくわからないな。

「いいじゃない、目覚めの三分、知らない誰かと楽しくおしゃべりしたって。それくらいの息抜きが、今のあんたには必要なのよ。この街にきてから、あんたの眉間にシワできちゃって、あーあ、見てらんないわあ。急速に老けるわよ、そんなんじや」

「困ったな、それは勘弁願いたい」

わざと大きなため息をついた。

クラウドと、ここで組織を立ち上げる。

我らが戦場の女神が、こちらについてくれると決まったのがありがたいばかりだ。

あれもこれもそれもすべて、一個ずつ地道に着手するか……

買い取った敷地内での、泊まり込み作業がはじまる。自宅というものも、一応は購入したが。仮の住まいだと思ふことにしている。僕たちの組織の基盤が整うまで、あちこちから妨害行為を

受けるだろう。その度に自宅を襲撃されるのは勘弁願いたい。落ち着ける場所と呼べるのは何年先か。

少しずつだが確実に、メンバーが揃ってきた。

僕の人脈というのは、どうにもうさん臭くて頼りない。——仕方がない。僕の人づきあいなんて、「その場さえよければいい」という、いい加減なものだった。リサイクルして使用できるような「価値ある誰か」がいるなんて、クラウスとK・Kに出会うまで、信じていなかった。だから、かなり粗雑に扱ってきた。……そんな僕に「メンバーに加わってくれないか」と声をかけられ、誰が「はい」と快く返してくれるだろう？

クラウスはまだ二十代になったばかり。盤石の人脈など築けていない。滅獄の血を刻まれし最強の男として崇拜・傾倒が強くなされている。「ごく一部の顔ぶれ」は、たしかにある。けれど、そういったやつらは、強さを追い求め、憧れるだけの若造がやはり多く。今の段階では捨て駒にしか配置できない。「ついにあのラインヘルツ家の三男坊が始動か」と、保護者感覚の強い名家の参入もあった。形作る「今」のメンバーとしては、名を連ねてくれるだけでハクがつく。正直ありがたい。でも、どこまで本気で、僕ら若輩者に力を貸してくれるだろう？

弱いカードでだって、もちろん、ポーカ―は勝てるさ。相手の手札の運のなさや、こっちのブラフ勝負だって、いくとこいけたりするんだろう。

でも、それには限度がある。

強い手札が揃ってれば、なんの心配もなく勝てるんだ。それは、どんな場面でも揺らがない、

裏切らない、確固とした「勝利への条件」だ。

本当に信頼がおけるメンバーというのは、ギルベルトさんの顔なじみと、K・Kの戦友というやつだった。

ギルベルトさんの紹介で引き入れたメンバーは、顔ぶれが豪勢だ。戦歴も凄まじい。文句のつけどころがない。この幹旋は「どこでこの繋がりが生じたのだろうか？」と首を傾げるものだったが、深くたずねてはいけないうるさげな雰囲気だけはひしひしと。

一方K・Kの戦友たちはといえ、バリバリの現役。無名だが、腕に自信があるやつらばかり。いろんな修羅場を、最前線で戦い抜いてきた猛者共だ。とはいえ無法の荒くれ者とは違う。彼らは「K・K」という、一つの強固な繋がりのもと、一致団結することができる。まだまだ僕やクラウスのために頑張ってくれとはいえないが、その内僕らの実績で、この信頼を勝ちとろう。

本拠地を確保した。人員も掻き集めた。資金もじゅうぶん。あと必要なのは「実績」だ。これを積み上げ、メンバーのモチベーションも高くなる。ほしい駒さえ口説きやすくなる。

しかし「実績」というのは、事件をただ解決するだけじゃ積めない。どのようにねじ伏せ、いかにように処理したかを明白にし、本部や、しかるべき機関に正式書類として提出、受理させ、サインをもらい。「この活躍を認める」とされ、はじめて「我々が解決した」といえるんだ。

ありがたいことに、この街は事件のオンパレードだ。NYPDは、いまだ立て直しの途中。やるなら今しかない。徹底的な、格の違いを見せつけてやれと、みんなの背を押した。そのせいで、NYPD付近で、僕たちの評判は最悪にまでガタ落ちしたけどね。

想定される、次の「特別な、大きな事件が起きるタイミング」は、この街がヒューマーとビヨンドの混合都市として正式に生まれ変わるとした上で、誰がおさめるか。その責任者である新・州知事が選ばれる日だ。選挙で決めようなんて話は出ない。ぶっちゃけてしまえば「ヒューマーはヒューマーにしか投票しないし、ビヨンドはビヨンドにしか投じない」のは明白だから、余計な時間と金を使うなということだ。

ビヨンドの持つ異能力に怯えたヒューマーが、徒党を組みはじめた。このままいくと、戦争になる。それは避けねばならなかった。

街の名も、ニューヨークから一変すると、噂が立っている。名前の候補を三つほど聞いた。やれやれ。生きて、そんな瞬間に立ち会う日がこようとは。世界はなんでも起こるんだな……

新・州知事を護衛する作戦を練るが、当然、新・州知事たちからは「いらぬ世話だ」と無下にされるだろう。彼らにとって僕らは、信用も実績もない、得体の知れない集団で。もつといえは僕らこそ、信用の置けぬ、怪しい組織だ。

なので、SPたちの中に紛れ込むしかない。見た目がシュツとして、いかにも強そうで、仕事ができそう。そんなメンバーで進めよう。いくら強かろうがクラウスの潜入は断念してもらおう。

クラウスが出られない以上、僕が出る。書類仕事に忙殺されていたが、ことは「世紀の瞬間」だ。爆弾なんかで無遠慮に、吹き飛ばされたんじゃない。現場仕事に向かない誰かにやらせればいいだろう。うってつ

事務仕事は誰かに任せればいい。現場仕事に向かない誰かにやらせればいいだろう。うってつ

けの知りあいが、そういえばいる。修行時代から知るやつだ。そいつに任せてみよう。
とにかく今は新・州知事の護衛やなんやら、目先の成果を上げるんだ。

我々の組織は、名を、ライブラとした。

新・州知事のお披露目もすんだが、背後には数多くの妨害の手が伸びていた。それらを片っ端からぶん殴っていった。果てには、捻り潰した。過去にも未来にも、これだけの数の組織を壊滅させた日はないだろう。

これから貸し借りを作りながらやっていくかもしれないから、警察にはいい顔しとけて、全員に伝えていたけど。向こうはやっぱ、吠えてくるよね。NYPDからHLPDと名を変えた組織は、玩具の拳銃じゃ太刀打ちできないと、この数日で痛いほど知ったくせに、それくらいしか武器がなくて。歯がゆそうで、可哀想に見えた。

大立ち回りできるっていうのはいいもんだ。とはいえ僕らは陰ひなたの身。あまり仰々しく盛大にやっちゃいけないって、もちろんわかかってる。

……事務を任せていたメンバーが、情報を持ち逃げした。

幸いにも、そいつがよその組織に情報を売る前にことが露見し、始末することはできたが。組織が結成され、初の裏切り者が出たという事実は、まことに不名誉なことであり。若干の動揺を構成員に与えることとなる。

こういう時、組織をまとめるのに、もつとも簡単に効率がよいものとはなにか。——恐怖だ。

ライブラに集まったメンバーは、いずれもが手練れだが、生きてりや人間、弱味の一つくらい確実にある。恋人、母親、息子。趣味や性癖、知られたくない過去つての面白い材料だ。

本人が秘密にしているものを抑えるのは、なんとも威力ある脅しになる。そういうのを丁寧のひとつひとつ調べ上げ。逃げ場をなくしていくことにした。

そりゃあ当然嫌われるよね。でもいいんだ。だいたいの組織ではアメとムチが必要で、ライブラではクラウスがアメ、僕がムチになればいいだけの話だから。副官っていう立場からしてもう、嫌われ役は決定していたじゃないか。僕は僕のやれることを、全力でするだけだ。

それでも。ちよつと疲れてしまった。自分でも、その疲れは理解できた。

休みたい、ゆっくりしたい。あわよくば癒されたい。けれど、救いを求めるには物騒すぎる街だし、仲間内でも弱音を吐けない状態に追い込んだのは、他ならぬこの僕。

気軽に「外」に癒しを求めようとも、アテなどない。僕には親も兄弟もないし、唯一の友人のクラウスはこの街にいるし、唯一女性として尊敬しているK・Kは他の男のものだし。

ふと視線が、スマートフォンに落ち着く。

目覚ましアプリ、か。入れたつきり、そりゃや一度も試していない。どうやって使うのかくらい、目を通してみよう。

アプリを開けば、右側が「起こされたくらい」という、可愛らしい女性のイラスト。左側が「起こしてあげるね」という落ち着いた雰囲気女性のイラスト。左側をタップすれば、動作説明がはじまる。

こういうアプリは、学校にいく必要のある学生なんかが主に使うんだろうか？ というくらい、簡単な説明までイチからするから、しばらく説明を読み飛ばす。

そろそろ説明の核にきたらどうか？ ええっと？ 起こした相手・起こしてくれた相手の名前は表示され、一定数、履歴に残る。ユーザー名の横には個別番号が振られ、たとえば「リチャード4633」と「リチャード88144」さんがいても、それは（スマホ二台持ち、などでないなら、恐らくは）別人であるとのこと。

通話時間三分無料とはいえ、三分きつちり話をする必要性はナシ。三分で強制的に通話は切れる。トラブルが発生した場合、通話相手をブロックする機能がついている。

僕の架電リストに男性名がずらつと並ぶのは、K・Kがそう設定したせいだろう。心配しなくても、プライベートで誰かを口説くなんてことはしない。若かった頃じゃあるまいし。性欲も落ち着いたおじさんになった。

欲をいえば、そう……ホッとしたい。こんなの、見知らぬ誰かに求めるのは間違ってるかもしれないけれど。HLの喧噪も知らないような、呑気な声を聞いてみたい。だから、時差のある国にかけたい。

どこ住みというのは、入力項目にはなかったのだろうが。対応言語という形で、おおまかな推理はできる。起きたい時間というのも、「あと五分後に起きたい」と表示されるため、こんな時間起きるなら、時差がどれくらいで朝かと想像するのに使える。

通話時間、三分。たった三分、僕はHLの外にいける。

簡単にいうなら、ハマった。

刺激を求める必要はない、ここはH Lだ。人間が体験できる、おおよその刺激以上のものが、ここでは体験できる。

だからこそ僕は、外に安寧を求めた。顔も知らない、損得も「ポイントいくばくか」程度の報酬というのが、なんとも可愛げがあつて、実に気楽でいいじゃないか。

それにこれは、義務じゃない。そりゃあK・Kにポイントを献上しなければならぬけれど。買えないポイントをK・Kだって「すぐに一万貯めて」とはいわないだろう。それくらい厚かましい女だったら、僕は彼女に惚れているさ。

暇な時間などないような身だけど、最長三分の現実逃避を試みる。たった数分だけ。僕の魂は、青空の中を飛ぶんだ。